

アートが
生まれる場所
アートが
紡ぐ時間

3

Art and Place,
Art and Time

Social Art Lab 2015-2017

九州大学ソーシャルアトラボ (SAL)
平成27~29年度事業成果報告書

平成29年度 ソーシャルアートラボの活動報告

ソーシャルアートラボでは平成27年度より、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受けて、アートの場をデザインするマネジメントを体系的に習得するための講座を開講してきた。各年、公共文化施設に勤める人や行政関係者、フリーのアートマネージャーや地域おこし活動をする人などを対象に、アートマネジメントの基礎的な知識を学ぶための「基礎コース」と、アートの現場で必要となる具体的なスキルを獲得するための「実践コース」から構成されるプログラムを考案・実施した。

平成27年度は「地域と向き合う企画運営」をテーマに、地域と向き合う創造的な企画を立ち上げる具体的な仕掛けや方法、資金調達や広報のスキルの獲得を目的とした。平成28年度は「地域の編集」をテーマとし、地域の価値を可視化し、ネットワークを創造的に活用しながら発信する力の向上を目指した。そして平成29年度は「地域と協働」をテーマとし、多様なアート実践の事例を踏まえて、アートと農に関する企画の提案と、地域の伝統工芸を新たな表現に昇華させる試みを通じて人材育成を行った。

01

基礎コース 「社会を読みかえる」

平成29年度の基礎コースでは、アーティスト、キュレーター、編集者、プロデューサーなど、多様なゲストを招き、社会で起こっているさまざまなアート活動やアプローチの多様性を共有することを目的に、3回シリーズの講座を実施した。この講座はゲストによるトークとフロアを交えたディスカッションから構成され、受講生がアートと社会についての思考を深めるきっかけを与えた。講座の会場に選んだのは、平成24年に閉校した、福岡市の中心部にある旧大名小学校。平成29年現在、旧大名小学校の一部は、福岡市スタートアップ事業の拠点として使用されている。講座にはアートに携わる人、地域おこしに携わる人、大学関係者のみならず、スタートアップに関心のある人たちも多数訪れた。

第1回 ソーシャル・エンゲイジド・アートについての議論

6月25日(日) 参加者数:60名

第2回 アートを読みかえる～フラットとリアルの思考～

7月30日(日) 参加者数:37名

第3回 メディアを読みかえる～ピクラーゲーションの現在～

8月27日(日) 参加者数:34名

会場:旧大名小学校内福岡市スタートアップカフェ・イベントスペース
(福岡県福岡市中央区)

第1回 ソーシャル・ エンゲイジド・ アートについての 議論

6/25
Sun



第1回の講座では、キュレーターの鷺田めるとアーティストの藤浩志をゲストに迎え、ソーシャル・エンゲイジド・アート（社会と関わるアート）の事例とその意味について、異なる立場から話していただいた。

鷺田は、アートプロジェクトにおけるキュレーターの役割について話した。従来、アーティストが作った作品の展示方法を考えるのがキュレーターの役割だったが、アートプロジェクトが作品として提示され、アーティストが場づくりに関与するようになると、アーティストの役割がキュレーターと重なるようになった。その時に鷺田は自身を、「アーティストの言うことを相対化する係」と位置づけたという。プロジェクトの中には、スタッフとして参加しつつも、アーティストとは違う思いをもつ人もいる。そこで、そのようなメンバーの不満や意見の聞き役に徹してみたところ、チームがうまく機能するようになったとの事例も話された。

藤はこれまでの活動紹介を交えて、「アート」という言葉に対する自身のつき合い方について語った。アーティストとして藤が大切にしているのは、「アート」をどうこうするというよりもむしろ、自身のエネルギーがどういうところとつながり、何ができるのかという視点だという。藤は、「赤ちゃんが手を伸ば



クロストーク。手前から長津、中村、ジャック。

してバブバブするように何かに触れ、つながろうとすることで、自分の周りにあるさまざまな問題に出会っていく。そういうものを無視せざちんと存在させるためには、関係をつないでいくことが重要だと考えている」と話した。

アーティストのジェームズ・ジャックと本学の中村美亜、長津結一郎を交えたクロストークでは、アートプロジェクトの評価や継続性にも話が及んだ。



藤浩志 ふじ・ひろし

美術家、秋田公立美術大学大学院教授
京都市立芸術大学大学院修了。バブアニューギニア国立芸術学校講師、都市計画事務所、藤浩志企画制作室、十和田市現代美術館館長を経て秋田公立美術大学大学院教授・副学長。国内外のアートプロジェクト、展覧会に出品多数。http://geco.jp



鷺田めると わしだ・めると

金沢21世紀美術館キュレーター
東京大学大学院美術史学修士課程修了。1999年より現職に就き、金沢21世紀美術館の立ち上げに携わる。開館後、アトリエ・ワンの個展や「島袋道浩：能登」など、現代美術や建築の展覧会を企画。第57回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館キュレーター。



7/30
Sun

第2回
アートを
読みかえる
〜フラットと
リアルな思考〜

第2回の講座では、古い平屋のリノベーションを通して新しい暮らしの価値を提唱する「平屋フリーク」のアラタ・クールハンドと、『ART iT』や『REALKYOTO』など、現代アートやカルチャーに関するメディアに携わる編集者の小崎哲哉を招いた。「アート」という言葉の射程と、その中身を再考する機会となった。

アラタは、東京や九州のフラットハウス（平屋）とそこに暮らす人々の生活を紹介しながら、自分の手で生活やコミュニティを作ることの醍醐味について話した。誰かが決めた価値観や理不尽な社会構造に縛られるのではなく、自身の生活から世の中を見渡し、自ら工夫して本当に豊かだと思える生き方を創っているアラタ。ここでは、実用的な「アート」で今の社会を読みかえる経験が語られた。

小崎は、20世紀に人類が犯した愚行を集めた写真集『百年の愚行』の編集者でもある。この写真集に焦点をあてた今回のプレゼンテーションで、「世界を俯瞰して眺めてみることで、ある時代の人間の思想と行動が招く悲



クロストーク。左端が藤枝、右端が池田。

惨な結末のみならず、地理的に離れた場所ので起こる出来事が実はつながりをもっていることも見える」と話した。このような方法で社会のリアリティをあぶりだし、人々が思考停止に陥らずに、変容してゆく社会を自分できかんでいくことを促していた。

本学の藤枝守、池田美奈子を交えたクロストークでは、現代におけるアーティストの役割や、現代アートにおける価値や教養などが議論された。



小崎哲哉 おざき・てつや

エディター
ウェブマガジン『REALKYOTO』発行人兼編集長。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員。2002年に写真集『百年の愚行』を、2014年に『続・百年の愚行』（いずれもThink the Earthプロジェクト）を刊行し、2003年、和英バイリンガルの現代アート雑誌『ART iT』（リアルシティーズ）を創刊。あいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサー。



アラタ・クールハンド

イラストレーター、文筆家
2009年、首都圏に残る古い平屋と、そこでの人々の暮らしを紹介した『FLAT HOUSE LIFE』（中央公論新社）を発刊。また、2017年夏に、九州の平屋を取り上げた『FLAT HOUSE LIFE Kyusyu』（辰巳出版）をリリース。現在は東京都下の文化住宅と福岡市の米軍ハウスの2か所を拠点に活動する真性「平屋フリーク」。

第3回 メディアを 読みかえる 〜ビツクラ ゲーション の現在〜

8/27
Sun



シリーズ最終回は、東京からクリエイティブディレクターの榎本了吉と、映像作家の萩原朔美をゲストに招いた。榎本と萩原は1970〜80年代に、渋谷を若者文化の一大中心地に転換させた仕掛け人である。その時に用いた手段の一つが雑誌だった。彼らが雑誌というメディアにどのような仕掛けを施し、社会にどのようなインパクトを与えたのかを、対談形式で話してもらった。

雑誌『ビツクリハウス』は1974年に創刊され、1985年まで続いた月刊誌である。この雑誌には、現状に対する不満をパロディーやジョークで新たな表現につなげていくセンスと技術がちりばめられていた。たとえば『暮らしの手帖』を「その日暮らしの手帖」に読みかえた特集を出したり、「ビツクラゲーション」という、日常で起こる小さな出来事を読者が投稿して雑誌上で面白がる参加型コーナーを作ったりしていたという。当時、ほかの雑誌にほとんどなかった読者参加型の企画には、現在も芸能界で活躍する大槻ケンヂさんや竹中直人さんも投稿していたそ

うだ。『ビツクリハウス』は、このように雑誌を讀者とのインタラクティブな関係に変えていっただけでなく、読者の交流イベントなども企画し、二次元に捉われない新しいメディアのあり方を次々と提案していた。

この回のキーワードは「カウンター」。『ビツクリハウス』のほかにも、萩原は実験映像を、榎本は展覧会のプロデュースなどを手掛け、常にカウンター精神で時代を切り拓いてきた。誰もが真似できることではないが、社会に対して創造的なアクションを起こしていくことの楽しさとインパクトが共有された講座となった。

榎本了吉 えのもと・りょういち

クリエイティブディレクター、プロデューサー
株式会社アタマトテ・インターナショナル代表。京都造形芸術大学大学院客員教授。1968年より天井棧敷に関わる。1975年、月刊『ビツクリハウス』（バルコ出版）を萩原朔美と創刊。1980年より「日本グラフィック展」、「オブジェTOKYO展」、「URBANART」を1999年までプロデュース。東京2020オリンピック・パラリンピック・エンブレム委員。



萩原朔美 はぎわら・さくみ

映像作家、演出家、エッセイスト
1969年、寺山修司主宰の演劇実験室「天井棧敷」の立ち上げに参加、演出家として活躍。1975年、月刊『ビツクリハウス』（バルコ出版）を創刊し、初代編集長を務める。著書に『演劇実験室・天井棧敷』の人々』（フレーベル館）ほか多数。多摩美術大学名誉教授。2016年4月より前橋文学館館長。



アーティストと連携した地域づくりを学ぶプログラムとして、福岡県八女市黒木町笠原地区を舞台に「奥八女芸農学校」を開校した。台湾、日本、アメリカのアーティストによるワークショップを体験し、そこから得られた知識をもとに企画を立案する実践型のプログラムである。笠原地区では平成28年よりさまざまなプログラムを実施してきたが、3年目となる今回は、非日常的な出来事を外からもってくるのではなく、笠原地区で地域にすでにある資源を活用しながら、新しい出来事をどのように創出するかに主眼を置いた。具体的には、3日間の合宿形式でアート・サマーキャンプ「かたる／きく／あじわうアート」を実施したあと、「企画立案プロジェクト」で笠原地区でのアートと農に関する新しいプロジェクトを受講生が構想した。最後に公開シンポジウム「アートと農のこれから」を開催し、これからの笠原地区での活動に思いを馳せる機会を作った。

アート・サマーキャンプ かたる／きく／あじわうアート

8月31日(木)～9月2日(土) 参加者:12名

会場:八女市笠原東交流センター「えがおの森」とその周辺

企画立案プロジェクト

9月～11月 参加者:12名 会場:九州大学大橋キャンパスほか

公開シンポジウム アートと農のこれから

11月25日(土) 参加者:24名 会場:八女市笠原東交流センター「えがおの森」

土の テイステイング



ワークショップにて、参加者に説明を行うジャック(右端)。



「テイステイング」で、グラスに注がれた土のにおいをかぐ。

平成29年度の笠原地区での講座のプレ企画として、アーティスト・ユニット「世界土協会」による、土を五感で「味わう」ワークショップを開催した。参加者には思いのある場所やふだん暮らしている場所の土をもち寄ってもらい、順番にそれぞれの土にまつわるストーリーを話してもらうとともに、ワイングラスや盃などに注がれた土を、見た目やにおい、手触りによって「テイステイング」した。「人の記憶と土の特徴が結びついた特別な体験になった」という感想や、「土という広大な面積を占めるものを小さいカップに入れ、臭いをかいで話を聞いて、鼻と耳の間あたりでうっとり、酔いが回る感じでおもしろかった」と

いう感想が寄せられた。NPO法人八女空き家再生スイッチの協力により、明治中期に建築された旧八女郡役所を会場に、大きな土間が広がる空間と、その奥にある憩いの場「Kitorasu」を利用した。

5/29 Mon

世界土協会 せかいつちきょうかい

アーティスト・ユニット

土に関心をもち作品制作を行うジェームズ・ジャック、南条嘉毅(なんじょう・よしたか)、吉野祥太郎(よしの・しょうたろう)の3人により構成されるユニット。近年の主な展覧会に「水と土の芸術祭 2015」(新潟)、「S.Y.P. Art Space 2016」(東京)、「ICHIHARA ART × MIX 2017」(千葉)がある。http://arttokyo.sub.jp/wda/ja/

アート・サマーキャンプ

かたる／きく／あじわうアート

ワークショップ あじわうとは？

台湾から来訪したウー・マーリーは、人々の背景にある食文化の違いにフォーカスするワークショップを実施した。これまでの作品制作やその背景にある考え方についてレクチャーを行ったあと、生のものや加工されたものなど、何種類もの「生姜」や「にんにく」を提示。4〜5人ずつのグループにわかれた参加者に、それぞれの味わいの違いを話し合うように促した。また、食材に詳しい地元住民から話をうかがう時間も持った。

その後、NPO法人山村塾が管理する畑まで歩いていき、さまざまな野菜を収穫。その

食材をどのように調理するかをグループで話し合い、アイデアを出し合った。山村塾に滞在している外国人のワークショップ参加者も合流し、育った国や地域が多彩なメンバーたちとともに、包丁の入れ方、味付けの細かいこだわりなど、さまざまな意見を出し合いながら、調理した。最後は全員でその食事を囲み、小さな宴会のような場になった。ウーが、「味わう」という行為や、「おいしい」と感じる価値観について、受講生たちに何度も問いかけていたのが印象に残った時間であった。



野菜を収穫するため、参加者たちと畑へ向かうウー・マーリー（中央）。



ワークショップの様子。「生姜」や「にんにく」を味わい、違いを話し合う。

8/31 Thu - 9/2 Sat

ワークショップ 地球の声を聴こう

ジェームズ・ジャックのワークショップでは、簡単なレクチャーのあと、全員で車に分乗し、山村塾が管理している田畑を訪れた。ジャックはまず、現在に使われていない畑で「地球の声を聴く」ことを促した。寝転がり、しゃがみ、それぞれのスタイルで土の音や感触、におい、風の音などにじっくり向き合う時間を15分ほどもつ。夏の終わりのさわやかな空気の中、静かな時間が流れる。その後、稲

が育ちつつある美しい棚田にまで降りていく。山村塾は除草剤などを使用しない農業を行っているため、除草作業を人力でやる必要がある。参加者たちは足袋をはいたり、裸足になったりして、田んぼに自らの足を入れる。ジャックからは、いつもよりもゆっくり土の

感触を味わうように、と促される。除草が終わったあと、もとの畑に戻り、ふたたび「地球の声を聴く」。土のにおいや風の音などに直接的に触れることで、その土地を感じる体験となった。



青空のもと、棚田にて除草作業。

寝転んだり、しゃがんだりしながら「地球の声を聴く」。



企画立案 プロジェクト

9月-10月



企画を考案する受講生たちの様子。

アート・サマーカーンプの体験をふまえ、受講生たちはそれぞれの持つ背景や特技、アイデアと、笠原地区の状況を重ね合わせるような企画を考案することを目指した。ここではアートを、作品やプロジェクトの制作を通じて、地域の中で人やモノによる新しい出逢いを生み出す「仕掛け」と捉えた。企画は受講生が個人個人で検討し、月に1回企画案を提出してもらった。

その企画案に対し、ソーシャルアトラボ

のメンバー（朝廣、ジャック、大澤、長津）のほか、外部アドバイザーとして小森耕太、三満田巧が加わり、企画としての体裁のみならず、具体的に笠原地区や八女周辺での活動とどのように接続することができるかなどを検討した。オフィスアワーとして、企画の相談に直接乗る時間を設けることもあった。このようなプロセスを踏むことで、受講生それぞれの独自性が活きるような企画案が育っていった。

三満田巧 みまんだ・こう

福岡県文化振興課学芸員

北九州市立大学大学院人間文化研究科修了。北九州市立美術館やアートNPO勤務を経て2015年より現職。九州芸文館（筑後市）で開催する現代アートの展覧会などを企画している。主な展覧会に「街じゅうアート in 北九州」（2008～2014年）、「平野遼の余技展—画家の茶室—」（2014年）、「ちくごアートファーム計画2016～筑後の自然と創造力アートで地球と遊ぶ 木村崇人展」（2016年）、「CHIKUGO ART POT 2017 そーまのたらい展」（2017年）などがある。

小森耕太 こもり・こうた

特例認定NPO法人山村塾事務局長

※プロフィールはP98参照

ワークショップ 交歓の《火床》をつくる

京都から来訪した小山田徹は、「共有空間」の開発に力を注ぐアーティストである。はじめにレクチャーにて、どのように多様な人々が場をともにすることができるかということを探求したこれまでの実践を紹介した。その後、車や徒歩で移動し、きのこ村キャンプ場の上にあるログハウス「山帰来」へ。テントを立て、火を起こし、食材の下準備を分担して行った。日が落ち始めたころ、いくつもの小さなたき火が起こされ、バーベキューが始まった。受講生だけでなく、地域に呼びかけ参加してくださった方々も交えて、真つ暗闇のなか、小さな火だけを手がかりに、人々の小さな輪ができ、さまざまな語りの場が生まれ、てゆく。都心ではこのようなたき火はできなくなつて



たき火によって、人々の輪と、さまざまな語りの場が生まれた。

きたが、東日本大震災のあとの避難所では、火を起こすことでそこに人が集まり、そこから去りたくなつたら自然と離れられるような場が生まれていたという。「たき火を囲む」という行為を通じて、非日常的な語りの場が創出され、宴は深夜まで続いた。

ジェームズ・ジャック

アーティスト

※プロフィールはP121参照

呉瑪俐 / ウー・マリー

アーティスト

デュッセルドルフ芸術アカデミー卒業後、1985年より社会と関わる芸術実践に関心を抱き、ジェンダーの視点から歴史的な語りを探求するインスタレーションに着手する。また、コミュニティと深く関わるプロジェクトも多数実施。最近の作品はグローバリゼーションへの応答としてエコ・フェミニスト的な展開を見せており、都市の環境と発展などに焦点をあてたものが多い。ヴェネツィア・ビエンナーレ（1995/1997年）、台北ビエンナーレ（1998/2008年）、アジア太平洋トリエンナーレ（1999年）、福岡アジア美術トリエンナーレ（2005）など多くの展覧会に出展。2016年、台湾ナショナル・アート・アワード受賞。

小山田徹 こやまだ・とおる

美術家、京都市立芸術大学教授

1961年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。1998年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名でさまざまなコミュニティ、共有空間の開発を行ない現在に至る。近年、洞窟と出会い、洞窟探検グループ「Com-pass Caving Unit」メンバーとして活動中。大震災以降の女川での活動をもとに出来た「対話工房」のメンバーでもある。

公開シンポジウム アートと農の これから

11/25 Sat



公開シンポジウムはふたたび「えがおの森」で開催。本学の長津からプロジェクトの概要

が紹介されたあと、受講生による企画の発表が行われた。企画は、遠い未来を見据えたものもあれば、何らかのアクションが近い将来起こりそうなものもあった。中にはすでに行動を起こした実践報告もあった。地域の祭りへの持ち込み企画、合宿形式のアートワークショップ、地域に眠っている映像を集めた上映会など、さまざまな種類の企画が提案され、

地域住民や受講生同士で意見を交わし合っていた。

後半は大南信也から、徳島県神山町での先進的なアーティスト・イン・レジデンスの取り組みについて講演があった。神山町のアートを切り口にしてクリエイティブな地域づくりが行われるようになったプロセスが紹介され、これからの笠原地区でどのようなことが実際にできるかを考える契機になった。

大南信也 おおみなみ・しんや

認定NPO法人グリーンバレー理事長

1953年徳島県神山町生まれ。米国スタンフォード大学大学院修了。1990年代初頭より神山町国際交流協会を通じて「住民主導のまちづくり」を展開。1998年米国発祥の道路清掃プログラム「アドプト・ア・ハイウェイ」を全国に先駆けて実施するとともに、1999年「神山アーティスト・イン・レジデンス」などのアート事業を相次いで始動。2007年神山町移住交流支援センター受託運営を開始し、2011年度には神山町史上初となる社会動態人口増を達成。2010年10月以降ITベンチャー企業等16社のサテライトオフィスを誘致。「創造的過疎」を持論にグローバルな視点での地域活性化を展開中。

03

フォーラム&ワークショップ 「クリエイティブ・アーカイビングの手法」 〜拡張する記録のカタチ〜

平成29年度の実践講座の一つとして、ソーシャルアートラボは、地域の資源を活用した新しいアートの創造とそのアーカイブ制作プログラム「クリエイティブ・アーカイビングの手法」を実施した。博多織という伝統工芸のアーカイブともみなせるアート作品《織・曼茶羅》博多織の機音による》(ソーシャルアートラボ制作、P.12-13参照)をさらにアーカイブし、新たな発想や創作の源として活用する方法を探るためのフォーラムとワークショップを2日連続で実施した。この講座には、アーティスト、デザイナー、編集者、メディア関係者等が訪れ、多様な領域から招かれたゲスト講師の話に刺激を受けながら、アートプロジェクトの何をどのように残すのが真剣に議論された。

12月の現代舞楽の公演後、受講生によって、この作品を創造的に伝え残すためのアーカイブ展示が行われた。

フォーラム アーカイブとはなにか？

9月23日(土) 参加者:25名 会場:九州大学大橋キャンパスワークショップルーム

ワークショップ 『アーカイブとしての作品』のアーカイブとは？

9月24日(日) 参加者:13名 会場:九州大学大橋キャンパスワークショップルーム

サンケンシヨク アーカイブ発表 蚕繭糸織

3月4日(日) 会場:博多町家ふるさと館(福岡県福岡市博多区)

フォーラム アーカイブとは なにか？

9/23
Sat

講座初日は、身の回りの事象を何かの記録として読みかえることから始まった。本学の藤枝守による企画趣旨説明、池田美奈子によるアーカイブの基本概念と諸問題を共有するレクチャーに続き、編集者の古賀弘幸から文字のアーカイブ性についての話題提供があった。書体にはテキストに還元できないさまざまな様相が潜んでいる。つまり書体そのものが、身ぶりや呼吸などが折りたたまれた「拡張されたアーカイブ」とみなせるとの話だった。文化人類学者の飯嶋秀治のレクチャーのテ



ーマは「アーカイブとエクストラクト」。すなわち、情報の保管と抽出である。人間は文字以外にも身振りや画像で情報を残してきた。アーカイブを読み解いて情報を引き出すには、そのためのリテラシーが必要である。こうしたことが、飯嶋が長年研究してきたアポリジニに関わる興味深い事例とともに共有された。アーティストの井上明彦は、「地面を見上げる」という題で、現在の街並みに刻まれた土地の記憶を呼び起こすアートプロジェクトの実践について話した。とくに印象深かったのが、西アフリカのある地域ではアーティストのすることを「忘れない人、呼び覚ます人」と

定義しているという話だった。アーカイブは、どのような専門性をもつ人も参画できるテーマだ。なぜ人は残そうとするのか？ なぜ何かが残ってしまうのか？といった根本的な問いを掘り下げ、領域横断的に考える機会となった。



上から池田、古賀、飯嶋、井上。古賀はネットでの参加。

古賀弘幸 こが・ひろゆき
編集者、大東文化大学書道研究所客員研究員
法政大学文学部卒業。出版社に勤務して書に関する雑誌・書籍などを企画・編集したのち、現在フリーランス。書と文字文化の分野で執筆と書籍編集に従事。主な企画・編集に『書の総合事典』（柏書房）など。著書に『文字と書の情報』（工作舎）など。

飯嶋秀治 いいじま・しゅうじ
九州大学大学院人間環境学研究院准教授
1969年埼玉県本庄市生まれ。1997年から2002年まで福岡美術研究所非常勤講師。インドネシア（バリ島およびロンボク島）、オーストラリア先住民（アランタ民族）、日本の民俗社会（宮崎県椎葉神楽）などのフィールドワークを経て現職。共著に『社会学のアーリーナへ』（東信堂）、『支援のフィールドワーク』（世界思想社）など。

井上明彦 いのうえ・あきひこ
アーティスト、京都市立芸術大学教授
2006～07年、パリ第8大学造形芸術科招聘教授。人間と自然および身体と環境の関係を軸に、絵画・立体・写真・インスタレーションなど複数メディアによる作品制作、デザイン活動、地域社会と関わるアートプロジェクトに携わる。近年の主な展覧会に「反重力」（豊田市美術館、2013年）ほか。

ワークショップ 『アーカイブ としての作品』の アーカイブとは？

9/24 Sun



2日目は、実験映像作家の黒岩俊哉から、メディアに規定される記録方法の変遷と、デジタルメディアの危機についての話があった。また、伝統のアーカイブという観点から、博多織の織師である宮嶋美紀より、伝統を日々呼び起こしてつないでいくことの意味についての話があった。

その後、実際のアートプロジェクトをケーススタディとして取り上げ、新しいアーカイブのかたちを検討するワークショップへ移行。博多織の音から発想したアート作品《織・曼

茶羅〜博多織の機音による》にフォーカスし、作曲と構成を手がけた藤枝守（九州大学大学院芸術工学研究院）から、創作背景やプロセスが共有された。さらには、博多織という伝統工芸のアーカイブともいえるアート作品《織・曼茶羅》をまたさらに別の形でアーカイブし、新たな発想や創作の源として活用していく方法の探求がなされた。



上から黒岩、宮嶋、藤枝。

宮嶋美紀 みやじま・みき

博多織手織技能修士

2010年、博多織デベロップメント・カレッジに5期生として入学。2013年に卒業し、福岡市博多区の「おりおり堂」で創作活動に入る。2014年、「第112回博多織求評会」で経済産業大臣賞を受賞。

黒岩俊哉 くろいわ・としや

実験映像作家

1966年生まれ。九州産業大学芸術学部芸術表現学科メディア芸術専攻教授。同大学院造形表現研究科教授。近年では映像／舞台／パフォーマンス／音楽が融合するメディア芸術作品を多く手掛けている。

アーカイブ発表

蚕繭糸織

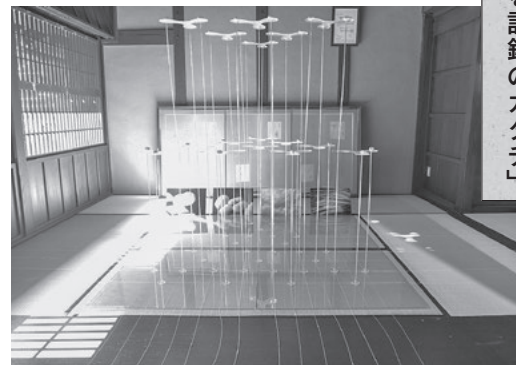
3/4
Sun

9月に行われたフォーラムとワークショップを受けて、講座の受講生たちが、現代舞楽《織・曼茶羅》博多織の機音による》をモデルケースに、アーカイブの制作に取り組んだ。発表の場として選んだのは、福岡市博多区の「博多町家」ふるさと館。かつて機場として使われていたこの建物は、今では博多の歴史や文化を伝える場として生まれ変わり、毎年多くの人が訪れている。この建物を舞台に、一つのアート作品に織り込まれた要素を創造的に展開する機会を作った。

このアーカイブ企画では、議論と実験を経て、博多織ができるまでのプロセスにフォーカスすることになり、イベント名を「蚕繭糸織」とすることに決めた。《織・曼茶羅》のエッセンスを残しつつ、写真やインスタレーション、パフォーマンスといった多様な表現を通して、糸の存在と変容のプロセスを見せる展示とパフォーマンスを展開した。



来場者に繭と糸の説明をする受講生。

インスタレーション
《糸のテーブル》。

04

調査「アートマネジメント
人材育成における効果的な
コミュニケーション」

九州大学では文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の一環として、九州沖縄地域のアートマネジメント・ネットワークの構築を目指してきた。3年目である今年度は、沖縄県でのアートマネジメントの担い手とネットワークを形成するとともに、そこで行われている実践を知ること、これまでの本学の取り組みを振り返る契機とした。

沖縄県では2012年8月に沖縄文化活性化・創造発信支援事業が開始。いわゆる「地域版アーツカウンシル」の機能が早くから導入されてきた地域である。今回の調査にあたっては、樋口貞幸（沖縄県文化振興会）に一般的な協力をいただき、支援する側と支援される側の複数の声を聞くことができた。

なかでも印象に残ったのは、経験豊富なプログラムオフィサーが複数人雇用されている点で、支援先に対して単に助成金を支給するだけでなく、時に二人三脚になり、手を取りながら伴走していく「ハンズオン」を丁寧に行っている点である。そのハンズオンの方法はプログラムオフィサーの力量や特性に応じて異なり、支援先とのコミュニケーションの頻度や方法もさまざまであった。ただ、支援する側とされる側の双方が目の前にある事業に対してともに目標を描き、ともに汗を流すことで、互いの信頼関係も醸成されるとともに、豊かな文化事業を育む土壌が生まれるように感じられた。

1回目調査

11月17日(金)
～18日(土)

2回目調査

1月19日(金)
～21日(日)

調査先(順不同):
沖縄県文化振興会
沖縄県文化振興課
沖縄県立芸術大学
NPO法人地域サポート
わかさ(若狭公民館)
株式会社クルビジョン
一般社団法人おきなわ
芸術文化の箱



05

論考集（本報告書）の制作

ソーシャルアートラボでは、平成29年度、アートと社会に関わる根本的な問いへの答えを意識しながら、アートと地域のこれからのあり方を展望する論考集（本報告書）を制作した。

昨今、地域のアートプロジェクトが全国的状況を呈し、アートと社会について論じる書籍が次々と出版されている。しかし、地域でアートプロジェクトに携わる自治体、NPO、地域企業、アーティストなどが抱える根本的な問いに答える記述は多くない。そこで、ソーシャルアートラボに関わったアーティスト・研究者・実践者が、3年間の経験を踏まえて、アートと社会の関係を理論的かつ実践的に再考する論考を執筆し、報告書としてまとめることにした。



編集会議。書籍コンテンツについて話し合う編集メンバー。

制作の流れ

- 5月 編集会議開始
- 8月 論考著者顔合わせ
- 9月 論考執筆
- 10月 論考第一稿提出
- 11月～1月 論考編集・プロジェクトページ編集
- 2月 デザイン
- 3月 入稿

出版

2018年3月31日

06

ソーシャルアート・フォーラム 「アートを通じた地域の再生」

文化庁の助成を受けて、3年にわたって実施してきたソーシャルアートラボのアートマネジメント事業。29年度で終了するにあたり、これまでの試みを振り返るとともに、九州地域が抱える地域課題を共有し、アートが地域のクリエイティブな未来に対してできることを議論するフォーラムを開催した。

前半は、ソーシャルアートラボの活動をケーススタディとしながら、大学・アーティスト・地域が協働することで生まれた新たな価値や、マネジメントの課題を整理し、フロアも交えて議論を行った。後半は、ゲストに福岡県朝倉市で廃校を利用した美術館「共星の里」を運営する柳和暢（アーティスト／共星の里ディレクター）と尾藤悦子（共星の里ゼ

ネラルマネージャー）を招き、平成29年九州北部豪雨災害からの再興について検討した。



3/11 Sun

2018年3月11日（日）14:00～17:30
Fukuoka Growth Next（福岡県福岡市中央区）
1階イベントスペース